日本中国語学会会報　2021年12月

https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/

◆目次◆

辛丑四季回想――ご挨拶とともに　小野秀樹（日本中国語学会会長）……1
佐藤進先生への名誉会員称号授与にあたって　松江崇（京都大学）……3
2021 年度全国大会総括……4
2021 年度学会奨励賞の選考経緯……5
理事選挙開票結果報告……6
支部例会実施報告　2021.6－2021.12……7
会議報告……9
例会および全国大会開催のお知らせ……17
事務局からのお知らせ……17

辛丑四季回想――ご挨拶とともに　小野秀樹（日本中国語学会会長）

「**我に許せ元日なれば朝寝坊**」: 今年の正月は気もそぞろであった。昨年 5 月に開かれた理事会で、今年度の大会開催校を内定できれば理想的であったが間に合わなかった。開催校はその後もなかなか決まらず、夏が過ぎ秋も過ぎ、ついに昨年の師走も下旬になってようやく二松學舍大学を本部とする体制が決定した。大会を全面的にオンラインで開催とすることも決まり、あとは鋭意準備を進めていくことになる。安堵したのも束の間、正月過ぎから理事選挙の実施方法について検討を始めたが、前例の一切無いことなので暗中模索の日々が続いた。その後次第に調査と議論が進み、春休み終盤になって、ようやくオンライン選挙実施の構想がまとまった。大学もコロナ禍の下で 2 回目の新学年を迎えた。コロナ禍でも桜は咲く。近所の川沿いの桜並木を散歩して、満開の桜の下を歩いていたら心が落ち着いた。塵事をよそに麗らかな春光の中で美しく咲き誇る桜花を眺めながら、自然の逞しさと感染症の怖さについて同時にしみじみと感じさせられた春であった。

「**若葉して籠りがちなる書斎かな**」: 今年度第 1 回の理事会が終わって間もない 5 月下旬に、富山大学が来年度の大会を引き受けてくださったとの報告が届く。まさに禍福は糾える縄の如し。富山大のご厚情に深謝する。高齢者のワクチン接種が進み、オリンピックが挙行された。五輪開催期間とその後しばらくは、一歩も家から出なかった。語学セミナーの準備は滞りなく進む。Zoom の動作確認のため、古屋先生と二人だけで簡単に予行演習をしたが、

短い時間ながら久しぶりにお話することができて楽しかった。人と人との交流が途絶えて随分になる。引き籠りでほとんど暑いということを感じないままに夏が終わる。

「明月や無筆なれども酒は呑む」: 9 月に入り、事務局側でも大会の準備が本格化する。考えてみれば、任期中は一度も人と直に顔を合わせることなく連絡を取り合ってきた。Zoom も活用したが、学会に関することだけに限っても、おそらくこの任期中に本にできるくらいの量のメールを読み書きしただろう。全国大会が無事に終わった日曜の夜に、個人的な打ち上げのつもりで酒を飲んだが、今年一番の美酒であった。どこへも行かず、自宅で迎えた大会ではあったものの、通常の大会よりも疲れた気さえした。準備と運営に携わっていただいた方々も、きっと似たような思いではなかっただろうか。初めての全面オンライン大会であったが、自分も二日間参加して、運営にご協力いただいた皆さんの態度と手際に敬服した。

「鐘つけば銀杏散るなり建長寺」: この原稿を書き始めた頃に、駒場の銀杏も散り始めた。落ち葉を踏んで歩きながら、春に桜を見たのがずいぶん前のことのような気がした。急ぎの用件もあって、竹越次期会長と早速引き継ぎの話を始める。来年 3 月には次期事務局に滞りなく引き継いでもらえるように準備を進めていかねばならない。あと 3 ヶ月あまり、任期満了までは気を緩めずにやっていこう……ただ、来年の正月は、「独居や思ふ事なき三ヶ日」という句のように、少しは長閑な気持ちで迎えられればいいなと思う。

以上、極めて主観的ではありますが、今年一年を振り返ってみました。上で引用した句はすべて漱石の作です（無論漱石の句境や状況と私の日常には何ら関係はありませんが）。引き籠りがちで、季節の変化を感じる機会がめっきり減っているので、せめてこの一年を俳句になぞらえて季節ごとに思い起こしてみました。

私個人としては、組織の長というのは周囲の支えが無ければ何事も成し得ないものだということをひしひしと実感した一年八ヶ月でした。任期満了までにはまだ少しありますが、みなさまにご挨拶を申し上げる機会は今回が最後になりますので、これまでお世話になりましたことに対して、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。おかげをもちまして、何とか学会の行事を遂行することができました。不備や不足もあったかと存じますが、百年に一度くらいの厄災に見舞われた状況下でのことですので、事情に免じて何卒ご容赦ください。それにしても長いトンネルです。この秋以降、我が国では小康状態が続いていると思っていたら、さらに新しい変種も出てきたりして、この感染症はなかなか出口が見えません。見通しが立たない中で、忍耐にも限度があるかもしれませんが、会長に就任したあとの最初のご挨拶でも述べましたように、最も重要なことはみなさまの健康であるという思いに変わりはありません。来年度以降も、現状に冷静に対処して、安全に研究活動を続けていかれることを切にお祈り申し上げます。来春からは新体制になりますが、引き続き、学会へのご協力とご支援を賜りますようお願い申し上げます。　　［2021 年 12 月 13 日記］

佐藤進先生への名誉会員称号授与にあたって　松江崇（京都大学）

東京都立大学名誉教授・佐藤進先生は、1947 年 4 月のお生まれで、東京都立大学修士課程を修了後、東京都立大学、富山大学、神奈川大学、二松学舎大学、北海道文教大学において長きにわたり古漢語を中心とした中国語学の研究・教育に尽力してこられました。

研究面では、『釈名』の声訓を構成する word pair の音韻的近似性の実質を明らかにした「釈名声訓考」（東京都立大学『人文学報』112 号、1976 年）、日本に遺された唐代の類書『翰苑』の夾注末の一群の助詞の来源を考証した「類書＜翰苑＞の注末助字―併せて遼海叢書の校書を窺う―」（富山大学『文理学部文学科紀要』2 号、1976 年）など、言語資料の文化的背景に対する深い洞察を踏まえた、古文献の漢語史的・文献学的研究によって広く知られています。なかでも揚雄『方言』に関する一連の文献学的研究は国際的にも著名であり、近年では漢文訓読・日本漢字音に関する論考を多くものされ、漢文訓読文を、「話し言葉」「書き言葉」に対する「読み言葉」と位置づける説を提唱されるなど、半世紀近くにわたりご論考を発表しつづけてこられました。

また入門書・概説書の執筆といった研究成果の社会への還元の面でも、雑誌『言語』に中国語学研究に関する記事を 9 年にわたり発表され（13 巻、1984 年～21 巻、1992 年）、雑誌『中国語』に中国語学習に関する記事を 38 篇発表されるなど（225 号、1978 年～481 号、2000 年）、数多くの仕事をされた他、中国音韻学の本格的な入門書『音韻のはなし』（慶谷壽信氏との共編訳、光生館、1987 年）の編訳にも従事されました。そして先生の代表的業績としては、漢和辞典『全訳・漢辞海』（戸川芳郎 監修、佐藤進・濱口富士雄編）（第 1 版、2000 年～第 4 版、2017 年）の編集があげられます。これは「古漢語辞典」としての性格を備えた漢和辞典として画期的な業績といえます。

先生の本会への入会は 1972 年であり、2001-2002 年度には学会誌『中国語学』の編集委員長（編集委員は 2001 年-2004 年度）を務めておられます。また、本会会員を含む多くの研究者の育成に尽力され、我が国の中国語学研究に多大な貢献をされました。

以上のように、佐藤進先生の研究面・教育面における斯界ならびに本学会への貢献は顕著であり、2021 年度大会において、名誉会員称号の授与が承認されました。

――略歴――

1947 年 4 月　北海道空知郡幌内町にて出生
1974 年 3 月　東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程修了
1974 年 4 月　東京都立大学人文学部助手（～1976 年 3 月）
1976 年 4 月　富山大学文理学部・人文学部講師・助教授（～1989 年 3 月）
1989 年 4 月　神奈川大学外国語学部中国語学科助教授（～1990 年 3 月）
1990 年 4 月　東京都立大学人文学部助教授・教授（～2005 年 3 月）
2005 年 3 月　東京都立大学名誉教授
2005 年 4 月　二松学舎大学大学院文学研究科教授（～2013 年 3 月）
2013 年 4 月　北海道文教大学外国語学部教授（～2021 年 3 月）

2021 年度全国大会総括

Ⅰ．今年度大会総括

第 71 回大会は、11 月 6 日（土）・7 日（日）にオンライン（開催校・二松学舎大学）で開催されました。

(1) 参加者数

第 1 日目（招待講演・ワークショップ）の参加者は 145 名前後（複数デバイスによる参加等を把握し得る限り除外した数字）でした。書店展示への参加は、第 1 日目の動画配信が 7 社、第 2 日目のバーチャル書店展示が 10 社でした。

(2) 総評

今大会は本学会として初めての全面オンライン開催となり、講演・ワークショップ・分科会研究発表・ポスター研究発表・書店展示・総会および理事選挙、すべてがオンラインで実施されました。

オンライン開催にあたっては、従来とは異なる準備や検討、様々なリソースが必要となりましたが、そのなかでも、応募規定や各種マニュアルの検討、作成にあたっては、会長および事務局の先生方より甚大なお力添えを頂戴しました。また、これらマニュアルに加え、予稿集をはじめとする各種資料を適切なタイミングでウェブ公開できましたのは、ウェブリソース委員会の先生方が迅速に作業を進めてくださったお蔭です。予稿集電子版については、10 月 27 日に無事完成、公開に至りました。さらに、大会両日とも使用しました Zoom のホストについても、本委員会委員だけでは数が足りず、多くの方にご協力いただきました。併せて御礼申し上げます。

大会 1 日目は、佐藤進会員（東京都立大学名誉教授）と木津祐子会員（京都大学）の招待講演が行われました。佐藤進会員の演題は「中国語の共同研究と研究後継者育成の半世紀」で、半世紀にわたるご自身の共同研究活動のご経験から、共同研究が若手研究者の育成に大きく貢献することを、たくさんの貴重な資料を提示しながら、また、現在ご活躍の研究者のお名前を多数挙げながら述べられました。木津祐子会員の演題は「「官話」再考」で、明清期官話の二つの性格――「官」が象徴する性格と「商」が代表する性格は、従来考えられてきたような融合的に溶け合う性質のものではなかったことを、官話の音とモードという側面から述べられました。講演者のお二方、司会を務めてくださった竹越孝会員（神戸市外国語大学）、招待講演に関して綿密に準備を進めてくださった開催校・二松学舎大学の戸内俊介会員に、そして、ご参加くださった会員各位に、心よりお礼申し上げます。

続いてのワークショップは、砂岡和子会員の企画による報告（「中文教学的设计与方法―高校师生的期待与现状」）が行われました。オンライン教育について、応用言語学、教育工学、教育心理学、文化社会学の視点から実践と調査に基づいた報告がなされ、遠隔教育先進国アメリカの状況、教育システム管理に秀でた中国の事例も紹介されました。前回の第 70 回大会では残念ながらワークショップの応募は 0 件でした。オンラインであっても極力、従来と変わらない形での開催を目指した今大会において、ワークショップ報告が実施されたことは大きな意義をもつものであったと言えま

す。

大会 2 日目の分科会研究発表・ポスター研究発表については、ワークショップと同様にオンライン開催であることを前提とした募集でしたが、前回大会とほぼ変わらない数の申込がありました。すべての発表と質疑応答が Zoom のミーティングルームにおいてリアルタイムで実施されましたが、5 つの分科会会場、ポスター発表会場、いずれも大過なく終了することができました。

(3) 今大会で見られた問題・課題

今大会の分科会研究発表において、発表者が発表時間に指定された会場に現れないという事態、いわゆるノーショウが起こりました。当該会員には「第 71 回全国大会研究発表応募規定」第 8 項に基づき「理由書」の提出を求め、すでに公開されている予稿集原稿については、当該発表が実施されていないことを示したうえで再掲載いたしました。

大会終了後には、会場として使用するツール、発表の残り時間を知らせる手段、質疑応答の方法についてなど、オンライン開催に関わる様々なご意見が寄せられました。来年度の第 72 回大会も、対面開催ができない可能性を視野に入れつつ準備を進めていくことになりますので、より理想的な大会運営の形を実現するべく、検討を重ねて参ります。

Ⅱ．来年度の全国大会にむけて

来年度の第 72 回大会の開催校は富山大学（代表：福田翔会員）がお引き受けくださいました。開催形態や開催日、および、ワークショップの応募期間、分科会研究発表・ポスター研究発表の応募期間等の重要事項については、確定し次第学会ウェブサイトに掲載します。また、かねてより大会運営の省力化、効率化を進めております。研究発表応募については応募フォームでの申し込み（第 70 回大会より）、予稿集原稿についてはテンプレート使用による作成（第 71 回大会より）となっておりますので、ご留意ください。

（大会運営委員会）

2021 年度学会奨励賞の選考経緯

編集委員会では、2021 年 3 月の第 1 回編集委員会において、『中国語学』267 号に掲載された論文の中から学会奨励賞の選考対象とする論文 2 本を選出し、さらに 5 月に開かれた第 2 回編集委員会において、選考対象論文 2 本について慎重な協議を行った結果、以下の論文を 2021 年度の学会奨励賞受賞論文の候補とすることに決定し、この案が理事会において承認された。

学会奨励賞受賞論文

三村　一貴氏

上古漢語のモダリティーマーカー「蓋」について　–その本質的機能

【選考の経緯】

本論文は、上古漢語における副詞「蓋」についてこれまで与えられてきたさまざまな解釈を総合し、その「本質的機能」を明らかにしようとする論文である。本論文では「『蓋』

はモダリティーマーカーであり、発話時に先行する事柄について、真偽判定を行わずに陳述する心的態度を表す」ことがその本質的な機能であると指摘する。そしてそこから派生して、伝聞と「蓋」の親和性の高さが伝聞の過去指向性・非直接経験性によって生じるものであること、また「蓋」のポライトネス表示機能はその表現の特質である非間接性を媒介として生じたものであることも指摘した。

本論文で検討されるのは副詞「蓋」一つのみであるが、上古の伝世文献を幅広く収集し、また先行研究への目配りも十分にゆきとどいている。同時に、ポライトネス理論をはじめ言語理論をもよく咀嚼しており、論文としての手順を正しく踏まえた記述の完成度の高さを認めることができる。また本論文が自ら提示するように、「蓋」の詳細な分析は上古のモダリティー体系全体の解明に資する可能性を十分に持ちうるものであり、今後の研究の展望についても説得的である。

審査の過程においては、従来の諸説の総合という面が強く、新規の知見が占める割合が必ずしも大きくはないこと、議論の中で挙げられた例文の解釈についてさらなる吟味が必要であるという問題点も指摘された。しかし、上古文献を博捜し多岐にわたる例文の中から「蓋」の本質的機能を導き出そうとする著者の姿勢と資質を窺うことのできる優れた論文であるとの評価をくつがえすものではなかった。よって、編集委員会は全員一致で本論文を奨励賞授賞論文として推薦し、理事会においても承認された。

本論文の筆者は春秋に富む。今後も広い視野と精緻な分析を両輪として、さらなる研究の進展を期待したい。

（編集委員会）

理事選挙開票結果報告

第 71 回全国大会期間中（二松學舍大学、2021 年 11 月 1 日～2021 年 11 月 7 日）にオンラインにて理事選挙が行われました。開票の結果、以下の方々が次期（2022-23 年度）会長および理事に当選されました（「会長及び理事選出に関する内規」参照）。なお副会長につきましては、後日新会長が理事の中から委嘱することになります。当選者並びに各得票数は以下の通りです。

■投票総数：788 票（うち、有効投票総数 715 票、白票 73 票）

■得票数：

1.	竹越　孝	54（会長）
2.	古川　裕	51
3.	秋谷　裕幸	35
4.	丸尾　誠	33
5.	遠藤　雅裕	32
6.	佐々木勲人	27
7.	吉川　雅之	27
8.	三宅　登之	23
次点	伊藤さとみ	22

（選挙管理委員長　野原将揮）

支部例会実施報告　2021.6 - 2021.12

◆関東支部例会

◇2021 年 10 月 9 日（土）午後 1 時～、オンライン（Zoom）での開催

・町田茂（山梨大学）：時間情報表出手段としての副詞“曾[经]”と時態助詞“了 1”、“过 2”

中国語は文法範疇としてのアスペクトを持つが、テンスは持たないと言われている。しかし時間情報を担う豊富な語彙が存在し、時間副詞と時態助詞及び一部の補語はその中心的存在である。本発表では、特に副詞“曾[经]”を取り上げ、それと“了 1”、“过 2”が共起する場合の文法的意味、語用論的機能を検討する。“曾[经]”は[発話時点以前—過去—における完了]という時間情報を含み、これと“了 1”、“过 2”の時間情報は一部重複するものの、これらはしばしば共起し、“曾[经]…了 1”は結果や成果に着目する場合に用いやすく、“曾[经]…过 2”は広く事態の提示に用いられる。一方“曾[经]…”は文脈依存性が高い。

・高柳浩平（中央大学・院）：類型論的観点から見る魏晋南北朝期の 5 種の直接使役構文

現代漢語における直接使役構文といえば専ら使成式(V＋C＋O)であるが、時代を遡ると魏晋南北朝期には5種にも及ぶ直接使役構文が用いられていた。言語類型論の使役研究の成果では、表現形式の小さい使役構文ほど意味として直接使役を表しやすいとされるが、同期にはこれに適さない“使”構文(使[令]＋O＋V)や分離型(V1＋O＋V2)や有標の分離型(V1＋O＋使[令]＋V2)が直接使役構文として用いられている。そこで本発表では、先行研究にて周辺的な形式とされてきたこの 3 種の構文を、当時中心的な形式であったとされる 2 種の構文(使動用法[V＋O]と使成式)と共に論じることで、魏晋南北朝期の直接使役構文の類型をまとめたい。

◆関西支部例会

◇2021 年 12 月 18 日（土）午後 1 時～、オンライン（Zoom）での開催

・郭丹磊（大阪市立大学・院）：心身状態を表すオノマトペに関する中国人日本語学習者の現状分析

日本語の擬音語・擬態語は数量も種類も豊富で、コマーシャルや日常会話、文学作品などに頻繁に使われているのに対して、中国語の擬音語・擬態語は日本語より少なく、あまり使われていない。それゆえ、中国人の日本語学習者にとって、オノマトペの勉強は大切である。中国人日本語学習者による身体的特徴や人の気持ちに関するオノマトペの習得現状を把握するため、本研究を行う。本研究を通して、中国人日本語学習者はオノマトペの習得にどの程度を得ているか、選択問題に正解率が高いと正解率が低い原因はそれぞれ何であるか、中国人日本語学習者が考えるオノマトペの難しいところと学びたいことは何か、オノマトペの習得は学習環境との関係とオノマトペを習得するための条件は何か、これらの問題を明らかにする。

・孫藝珊（神戸市外国語大学・院）：认知语境视角下的汉语鳗鱼句研究

“鳗鱼句”一直被认为是日语中独有的表述方式。近年来已有学者指出“鳗鱼句”也存在于诸如英语、汉语等语言中，但其他语言中的“鳗鱼句”用法与日语“鳗鱼句”差异较大，很多时候不可相提并论。有关“鳗鱼句”的先行研究多是从构式还原的角度出发去探寻这一句式的来源，鲜少有人着重从“鳗鱼句”与语境的关系出发进行研究。而“鳗鱼句”是否成立、能否独立使用常常受语境制约。另外，汉语“鳗鱼句”作为特殊的判断句，其被认为是由于说话人的省略

所致的语言现象（赵元任，1979），这一语言现象亦涉及转喻的使用。本文拟从认知的角度出发考察汉语鳗鱼句与百科语境、物理语境、语言语境的关系以及汉语鳗鱼句内部转喻现象的发生机制。

・講演

山﨑雅人（大阪市立大学）：中国四大奇書と満洲語文語研究

四大奇書のひとつ『三国志演義』が史上初めて外国語に翻訳されたのは、順治七年(1650)の満洲語文語訳であり、清朝の中国制覇に用いるためであったと言われます。その後、1989 年の『西遊記』錫伯語文訳をもって全四書の翻訳が揃ったことになります。中国文化が周辺諸民族に与えた影響の大きさについてはいまさら贅言を要しませんが、満洲語文語というマイナーな言語の研究分野においても、数量詞研究などの方法論に用いられる中国語学の知見が裨益するところ大であることを、「満洲語文語の具格接辞選択に伴う数的有界性」という拙論を紹介することで明らかにしたいと思います。

◆九州支部例会

◇第 1 回例会：2021 年 7 月 10 日（土）午後 1 時～、オンライン（Zoom）での開催

・王志英（沖縄大学）：中国語の“了”をめぐって〔この発表は、発表者の都合で取り消しになりました。〕

中国語の助詞“了”について、“了 1”は基本的に実現（完了）、“了 2”は変化を表すと説明されている。しかし、(1) 天快下雨了。(2) 她昨天晚上 12 点才回来。(3) 来了，来了。は反例になる。本発表は刘 2001 の“了”についての説明“表示动作行为的发生和状态的出现，用在动词和形容词后。”に概ね賛同するが、“了”のプロトタイプ的意味は「動作や状態がスタートする」という意味を表すと考える。“了”は前後の文脈・会話の背景・言語の環境・修飾語・補語などと合わせて初めて「完成」、「完了」、「変化」などの意味を得るのである。本発表では、“了”を“了 1”、“了 2”に分けず、プロトタイプ的意味が一つしかないことを主張する。

・謝平（福岡大学）：「NP1＋V＋着/了＋NP2」と「NP2＋V＋在＋NP1」―《呼兰河传》での用例を中心に―

「NP1＋V＋着/了＋NP2」と「NP2＋V＋在＋NP1」は、両方とも存在を表すことができる。例えば、“那儿坐着一个人。”、“有一个人坐在那儿。”はともに「あそこに人が座っている」という意味を表す。特に動詞が静態動詞である場合は、両者に互換性があるとされている（宋玉柱 1988、聂文龙 1989、卢英顺 2017 など）。しかし、静態動詞が用いられても、互換できない場合もあれば、また、互換ができてもどちらかを用いた方がよいという場合もある。本発表では、存在を描写する場面の多い文学作品の《呼兰河传》での用例を中心に、統語論だけではなく、語用論の視点も取り入れながら、２つの構造の意味機能及び両者の使い分けを考察する。

・宮下尚子（福岡大学）：-üen の自由変異音と教材での記述について

“冤 園 遠 院”に代表される韻母-üan には[yan][yɐn][yæn][yɛn][yœn]など多くの自由変異音がある。20 世紀前半くらいまでの民国時期の教材では[yan]を採用するものが多い一方で、当代の教材では[yɛn]とするものも多く、もはや異音が存在しないかのような論もある（「Yan、Yuan 能否修改」『語文建設』1991）。本報告では次の流れに従って発表を行う。(1) 過去の文献および日本で用いられている教材における-üan の説明を分析する。(2) 北京を舞台にしたドラマでの-üan の発音を記述し分析する。(3) さらに(1),(2)の分析を踏まえた上で、歴史的な変化と共時的な異音の広がりを確認する。この結果を今回の発表の分析結果を発音指導等今後の教学の発展に資するものとしたい。

・秋山淳（下関市立大学）：コーパスに基づく VR（動詞＋結果）他動詞構文の認知言語学的分析―“V 红”を一例として―

中国語の結果複合動詞(VR)は動作を表す動詞 V(＜ACT＞)と非対格(状態変化)動詞 R(または一部の形容詞)(＜BECOME(BE)＞)の組み合わせであり、主語(NP1)の行為が NP2(目的語)に何らかの変化を引き起こす＜CAUSE＞の概念は V にも R にもないと考える。本発表は、結果補語(R)が“红”を一例とする VR 他動詞構文を認知言語学の観点から考察を行い、VR 他動詞構文の意味解釈は、(i)R と組み合わさる V の種類(“烧/气/羞/染/涨”…＋“红”)、(ⅱ)VR 他動詞構文に現れる主語や目的語の意味内容(“礼子羞红了双颊”(BCC)/“她的嘴里喊出的淫荡话语羞红了我的脸(BCC)”)により決定されること、即ち百科事典的知識が必要であることを明らかにするものである。

◇第 2 回例会：2021 年 12 月 11 日（土）午後 1 時～、オンライン（Zoom）での開催

・王志英（沖縄大学）：中国語の“了”をめぐって

中国語の助詞“了”について、“了 1”は基本的に実現（完了）、“了 2”は変化を表すと説明されている。しかし、(1) 天快下雨了。(2) 她昨天晚上 12 点才回来。(3) 来了，来了。は反例になる。本発表は刘 2001 の“了”についての説明“表示动作行为的发生和状态的出现，用在动词和形容词后。”に概ね賛同するが、“了”のプロトタイプ的意味は「動作や状態がスタートする」という意味を表すと考える。“了”は前後の文脈・会話の背景・言語の環境・修飾語・補語などと合わせて初めて「完成」、「完了」、「変化」などの意味を得るのである。本発表では、“了”を“了 1”、“了 2”に分けず、プロトタイプ的意味が一つしかないことを主張する。

・劉驫（九州大学）：談話連結語“只是”の手続き的意味について

本発表では談話連結語“只是”の手続き的意味（Blakemore1987, 2002）について考察を行う。これまで、“只是”について記述的研究が行われているものの、理論的なアプローチに関しては周・邹（2011）以外ほとんど見られない。本研究は周・邹（2011）の問題点を指摘し、“只是”の手続き的意味について考察を行った。その結果、“只是”は主に文脈への制約を課していることがわかった。具体的には、“只是”は一般的に先行発話によって提示された質問に対する答えが矛盾している文脈において用いられ、後続発話には話し手のポジティブなニュアンスや高評価が普通含まれないことが判明した。

会議報告

■ 2021 年度第 2 回理事会

日時：2021 年 11 月 5 日（金）16 時～18 時（Zoom によるオンライン会議）

出席者：小野秀樹（会長）；楊凱栄（副会長）；秋谷裕幸*、伊藤さとみ、遠藤雅裕、丸尾誠、吉川雅之（以上理事）；前田真砂美（大会運営委員長）；千葉謙悟（編集委員長）；鈴木慎吾（ウェブリソース委員長）；平田昌司（辞典編纂委員長）；池田晋、今井俊彦、松江崇（以上幹事）

* 学界展望編集委員長を兼ねる

■ 2021 年度評議会

日時：2021 年 11 月 6 日（土）10 時 15 分～11 時 45 分（Zoom によるオンライン会議）

出席者：構成員 56 名（定数 67 名）

■ 2021 年度総会

日時：2021 年 11 月 7 日（日）～11 月 14 日（日）（みなし総会〔Slack による質問・意見受付〕）

【報告事項】

1. 一般報告

1.1 会員動向（10 月 1 日現在）

松江幹事より以下の報告があった。

- 会員数（2020 年 10 月 1 日から 1 年間の増減:住所不明者、年度末退会予定者を含む）

			増減
総会員数（賛助会員をのぞく）		989 名	－12
（内訳）	顧問	5 名	±0
	名誉会員	12 名	－3
	通常会員	906 名	－12
	団体会員	5 名	±0
	海外会員	61 名	＋3
賛助会員		19 社	－1

- 〔昨年度除籍者〕52 名（国内会員 39 名 / 海外会員 13 名）［2020 年 9 月 18 日付］
- 〔今年度除籍予定者〕45 名（国内会員 38 名 / 海外会員 7 名）
- ご逝去 7 名（塚本照和名誉会員、松本昭名誉会員、杉田泰史会員、山本真味会員、坂井健一名誉会員、高橋由利子会員、荒川清秀名誉会員）

＊ 会員動向については、直近の数字ではなく、4 月 1 日付の状況を春の理事会に、10 月 1 日の状況を秋の理事会に報告する。［除籍者は 10 月中に確定］

1.2. 支部例会関連

池田幹事より以下の報告があった。

・過去一年間の実績は『中国語学』268 号「彙報」を参照。

・新型コロナウイルスの影響により、各支部とも引き続きオンラインによる開催を継続している。

2. 編集委員会報告

千葉委員長より以下の報告があった。

・『中国語学』第268号は2021年10月31日に1,230部を発行した。

・学会奨励賞受賞者として以下の1名を推薦した。

三村一貴（東京大学大学院）

「上古漢語のモダリティーマーカー「蓋」について ーその本質的機能」

3. 大会運営委員会報告

前田委員長より以下の報告があった。

〈報告事項〉

3.1. 第 71 回全国大会の準備状況

3.1.1. 招待講演

(1) 講演者：佐藤進（東京都立大学名誉教授）

題目：中国語の共同研究と研究後継者育成の半世紀

(2) 講演者：木津祐子（京都大学）

題目：「官話」再考

3.1.2. ワークショップ審査結果

5 月 31 日（月）に応募締切。応募総数 1 件。審議の結果、下記のとおり採用することに決定した（6 月 4 日持ち回り委員会決定）。

“中文教学的设计与方法—高校师生的期待与现状”（企画者：砂岡和子会員）

3.1.3. 研究発表（分科会・ポスター）応募・採択結果

6 月 30 日（水）に応募締切。応募総数 52 件。内、有効応募総数 51 件。不受理 1 件（同一の応募者による二重応募）。審査の結果、口頭発表 38 件、ポスター発表 2 件の計 40 件を採択した。不採択数は 11 件であった（7 月 26 日持ち回り委員会決定）。

3.1.4 予稿集について

予稿集原稿は 1 名を除き全て期限内に提出された。遅延した 1 名は、再設定した期限内に提出した。

予稿集の編成作業には大会運営委員会の委

員 4 名が当たった。70 回大会より原稿はテンプレートを使用して作成していただいており、編集作業の合理化に一定の効果が見られた。電子版は 10 月 27 日に公開された。

電子版は不分割のファイルと各論毎のファイルの両方を作成し、予稿集電子版のファイルには 2 種類の加工を施した。

（1）ヘッダーに日付と「日本中国語学会第 71 回全国大会」の文言を入れる

（2）改変・改竄を防止するセキュリティをかける

3.1.5. ポスターPDF について

ポスター発表については、ポスター（PowerPoint のスライド）を PDF に変換したもの（A4 サイズ、横向き、1 ページにスライド最大 4 枚、2 ページまで可）をウェブサイトに掲載することとした（4 月 15 日持ち回り委員会決定）。採択件数 2 件のうち 2 件とも提出があった。

3.1.6. 採択者公表後の変更点

分科会研究発表につき、自身の発表が講評付きであることを見落としたため、講評付き発表から講評なし発表へ変更したい旨、申出があった（9 月 19 日）。講評の有無について「大会プログラム」および「分科会タイムテーブル」で確認するよう求める指示の記載がなかったため、委員会での審議の結果、やむを得ない事情によるものと認め、講評なしへの変更を認めた。また、次回大会からは、講評の有無については「大会プログラム」および「分科会タイムテーブル」を必ず確認するよう、「採択者一覧」に付記することとした（9 月 23 日持ち回り委員会決定）。

3.1.7. 書店展示の方法について

第 1 日目は CM 動画をリアルタイム配信する。配信時間は招待講演の開始前および各休憩時間。7 社参加。

第 2 日目は、オンラインイベントツール「oVice」を使用したバーチャル書店展示を行う。利用時間は 9:00～17:00。出展参加各社のコアタイムは 12:00～13:00。10 社参加。談話室を兼ねることで会員同士の交流の場としても活用し、同時に書店展示へのアクセスを高める。

3.2. 第 72 回大会について

3.2.1. 開催校と開催日について

2022 年度の第 72 回大会は富山大学五福キャンパス（富山市）で開催される。対面開催の可能性については予断を許さないため、開催形態および日程については未定。追って学会ウェブサイトで公表する。

3.2.2 記念大会とすることについて

70 回大会より持ち越しとなっているが、72 回大会の開催形態が未定であるため、72 回大会に記念大会的性格をもたせるか否かについては、今後検討する。特別な予算措置が必要となった場合は、特別経費補助を補正予算に盛り込んでいただくよう要望する。

4. 辞典編纂委員会報告

平田委員長より以下の報告があった。

◆2021 年度第 2 回辞典編纂委員会

日時：2021 年 8 月 13 日（金）15：00～16：30 (Zoom によるオンライン会議、ホスト三宅登之会員)

出席者：：平田昌司（委員長）、大西克也、小野秀樹、木津祐子、朱春躍、竹越孝、三宅登之、山崎直樹、楊凱栄

【議事】

4.1. 本文初校の確認作業について

・執筆者への初校および返送のありかたについて意見交換し、新型コロナウイルス感染の防止の観点からも紙のやりとりを止め、PDF

のメール添付を原則とすることを決定した。
・執筆者・編纂委員による確認のほか、編纂協力者による kintone 上での確認作業を期間限定で依頼することが了解された

4.2. 原稿分量削減対応について

原稿分量が本辞典の予定ページ数を超過しているため、分量削減方針について審議、確認した。

4.3. その他

・巻頭に「上古中国語」「中古中国語」「近世中国語」「現代中国語」の４項目を置くこと【その後、協議して、総称を「中国語史略説」とすることに決まった】、分野別項目一覧（案）の作成、巻末引用文献目録の体裁について審議した。
・校正費用が過大にならないよう努力する必要性について情報を共有した。

◆『中国語学辞典』編纂作業進行状況

・7 月 21 日、9 月 13 日、11 月 17 日に、今後の進行予定について委員長と岩波書店編集部のオンライン打合せを行い、辞典編纂委員会に結果を報告した。
・初校はすべて返送を終え、年内に再校をすべて印刷会社に戻す予定。
・刊行は 2022 年 10 月（予定）として作業をすすめている。

5. 学界展望編集委員会報告

秋谷委員長より以下の報告があった。

5.1. 2020 年学界展望の編集

2020 年「学界展望 語学」は 2021 年 10 月 9 日発行の『日本中國學會報』第七十三集に掲載され、また 2021 年 10 月 31 日発行の『中国語学』第 268 号に転載された。

5.2. 委員長および委員の交代について

・新委員長については未定
・新旧委員の交代について

任期満了：野原将揮、戸内俊介、石崎博志、鈴木慶夏の各委員
再任：橋本貴子、加納希美、濱田武志の各委員
新任：宮島和也、楊安娜、塩山正純、小川典子の各会員

6.「第三回中国語学セミナー」について

小野会長より以下の報告があった。
・第三回中国語学セミナーは、以下の内容で開催された。

日時：2021 年 9 月 11 日（土）13:00〜18:00、Zoom による開催
講師および講義題目：

古屋昭弘（早稲田大学名誉教授）
「中古音と現代音」
楊凱栄（東京大学教授）
「事態のとらえ方にみる言語表現の相違 —— 中日対照を通じて」
大西克也（東京大学教授）
「上古中国語のヴォイスをめぐって」

・参加者数：118 名（会員 81 名、非会員 37 名）
・過去最高の参加者数であったが、非会員の参加が多かったのは、東方書店のツイッターで情報が流れたことが原因のひとつではないかという推測がある。今後の広報活動の参考になるかと思われる。

7. 顧問の委嘱について

小野会長より以下の報告があった。
・2021 年度第 1 回理事会において杉村博文会員（元会長）に顧問を委嘱する件が承認され、ご本人からも内諾をいただいた。就任は 2022 年 4 月 1 日から。

【審議事項】

1. 予算案・決算案

1.1. 2020 年度会計決算案（資料参照）

・今井幹事による報告と説明、及び石村広会計監査による監査報告があり、報告の通り承認された。

1.2. 2021 年度会計補正予算案（同上）

・今井幹事による提案と説明があり、原案の通り承認された。

1.3. 2022 年度会計予算案（同上）

・今井幹事による提案と説明があり、原案の通り承認された。

2. 内規の変更について

・2019 年 11 月に開催された理事会において、学界展望 WG を次年度に常設委員会として設置する提案がなされた際、その提案文書の中に「学界展望編集委員は評議員構成員とはしない」という条項が盛り込まれていたことを受け、「5. 学界展望編集委員会に関する内規(→第 15 条，第 16 条関連)」を以下のように変更することを提案し、承認された。

改正前	**1. 委員会に関する内規（→第 15 条，第 16 条関連）** **(2) 委員** ア 委員数は 8 名とする。但し，うち 1 名は選出時に理事の職にある者をもって充てる。 イ 委員の任期は原則として，全国大会終了以後翌々年大会終了までの 2 年とし，再任を妨げない。委員長の任期は 2 年とする。但し，業務遂行上の必要があるときは，1 年任期の委員を置くことができる。 ウ 委員の改選は本委員会が発議し，理事会の承認を経て，会長が委嘱する。
改正後	**1. 委員会に関する内規（→第 15 条，第 16 条関連）** **(2) 委員** ア 委員数は 8 名とする。但し，うち 1 名は選出時に理事の職にある者をもって充てる。 イ 委員の任期は原則として，全国大会終了以後翌々年大会終了までの 2 年とし，再任を妨げない。委員長の任期は 2 年とする。但し，業務遂行上の必要があるときは，1 年任期の委員を置くことができる。 ウ 委員の改選は本委員会が発議し，理事会の承認を経て，会長が委嘱する。 エ 本委員会の委員は，それをもって評議員を兼任することはない。

3. 顧問・名誉会員の推挙について

名誉会員に佐藤進会員が推挙された。

2020 年度会計決算書　　2021 年 11 月 14 日総会承認

日本中国語学会2020年度会計決算書（案）（2020年4月1日～2021年3月31日）

〈収入の部〉　　単位：円

収入	予算	決算
前年度繰越金	7,823,795	7,919,252
積立からの繰入金	2,280,000	2,280,000
通常会員・海外会員会費収入	6,000,000	5,189,677
賛助会員会費収入	600,000	540,000
『中国語学』売上金	400,000	371,554
予稿集売上金	450,000	0
学界展望補助金	300,000	300,000
通常貯金利子		22
計	17,853,795	16,600,505

〈支出の部〉　　単位：円

支出	予算	決算
会誌印刷費	2,000,000	1,484,230
予稿集印刷費	800,000	0
大会助成費	300,000	50,000
支部活動助成費	300,000	15,233
中国語学セミナー開催経費	200,000	8,619
通信費	500,000	249,191
事務費	2,000,000	1,685,579
大会事務費	300,000	188,400
学会連合等年会費	42,000	40,000
事務局費	450,000	450,000
編集委員会経費	120,000	60,000
学界展望編集委員会経費	300,000	300,000
ウェブリソース委員会経費	120,000	113,000
ホームページ関連経費	180,000	85,638
大会運営委員会経費	220,000	170,000
辞典編纂委員会経費	180,000	116,688
旅費交通費	700,000	0
会議費等雑費	180,000	0
学会奨励賞	100,000	100,000
会員名簿印刷費	900,000	709,500
積立金 [内訳] 記念大会積立金（40万） 事務委託関係積立金（132万） ウェブサイト構築積立金（50万） 国際会議開催支援積立金（20万）	2,420,000	2,420,000
予備費	5,541,795	8,354,427
計	17,853,795	16,600,505

監査の結果、経理内容は適切であり、経理諸表は的確に処理されているものと認めます。

2021年9月16日

2020年度会計監査　石村広

2020年度会計監査　飯田真紀

2021 年度会計補正予算案（2021 年 4 月～2022 年 3 月）

2021 年 11 月 14 日総会承認

単位：円

＜収入＞	
前年度繰越金	8,354,427
積立からの繰入金	2,420,000
通常会員・海外会員会費収入	5,000,000
賛助会員会費収入	600,000
『中国語学』売上金	400,000
学界展望補助金	300,000
計	17,074,427

備考	
中国語学辞典寄付金	3,000,000

＜支出＞	
会誌印刷費	2,000,000
大会助成費	300,000
支部活動助成費	200,000
中国語学セミナー開催経費	200,000
通信費	300,000
事務費	2,000,000
大会事務費	300,000
学会連合等年会費	42,000
事務局費	450,000
編集委員会経費	120,000
学界展望編集委員会経費	300,000
ウェブリソース委員会経費	120,000
ホームページ関連経費	180,000
大会運営委員会経費	220,000
辞典編纂委員会経費	120,000
旅費交通費	700,000
会議費等雑費	180,000
学会奨励賞	100,000
選挙関連費	160,000
積立金	3,560,000
[内訳]	
記念大会積立金(42 万)	
事務委託関係積立金(134 万)	
ウェブサイト構築等積立金(50 万)	
国際会議開催支援積立金(30 万)	
コロナ禍基金（100 万）	
予備費	5,522,427
計	17,074,427

2022 年度会計予算案（2022 年 4 月～2023 年 3 月）　2021 年 11 月 14 日総会承認

単位：円

＜収入＞	
前年度繰越金	5,522,427
積立からの繰入金	3,560,000
通常会員・海外会員会費収入	5,000,000
賛助会員会費収入	600,000
『中国語学』売上金	400,000
学界展望補助金	300,000
計	15,382,427

備考	
中国語学辞典寄付金	3,000,000

＜支出＞	
会誌印刷費	2,000,000
大会助成費	300,000
支部活動助成費	200,000
中国語学セミナー開催経費	200,000
通信費	300,000
事務費	2,000,000
大会事務費	300,000
学会連合等年会費	42,000
事務局費	450,000
編集委員会経費	120,000
学界展望編集委員会経費	300,000
ウェブリソース委員会経費	120,000
ホームページ関連経費	180,000
大会運営委員会経費	220,000
辞典編纂委員会経費	120,000
旅費交通費	700,000
会議費等雑費	180,000
学会奨励賞	100,000
会員名簿印刷費	800,000
積立金	3,700,000
[内訳]	
記念大会積立金(44 万)	
事務委託関係積立金(136 万)	
ウェブサイト構築等積立金(50 万)	
国際会議開催支援積立金(40 万)	
コロナ禍基金（100 万）	
予備費	3,050,427
計	15,382,427

例会および全国大会開催のお知らせ

今年度の例会実施予定

各支部における今後の例会実施予定は次のようになっています（いずれもオンライン開催）。

北海道支部：2022 年 3 月
関東支部：2021 年 3 月
北陸支部：2021 年 3 月

次年度以降もひきつづき支部例会への発表、参会を歓迎いたします。発表者の方には発表要旨（300 字以内）の事前提出をお願いしています。この要旨は、学会ウェブサイト上の例会案内のページで紹介し、年に 2 回発行の学会ニューズレターにも掲載されます。

なお、開催予定は変更になることもありますので、詳細は各支部例会世話人までお問い合わせ下さい。担当者の連絡先については、学会ウェブサイトをご参照下さい。

また、次年度もオンライン開催を原則とするかどうかについては、決定次第、学会ウェブサイト等でお知らせいたします。

（事務局）

第 72 回全国大会開催のお知らせ

日本中国語学会第 72 回全国大会は、2022 年 11 月ごろに富山大学五福キャンパス（富山市）にて開催する予定です。開催形態および日程は未定です。決定次第お知らせいたします。また、ワークショップおよび一般研究発表の応募要項についても決定次第学会ウェブサイトに掲載いたします。

（第 72 回全国大会準備会）

事務局からのお知らせ

■ 『中国語学』269 号投稿論文募集

『中国語学』第 269 号の投稿論文を募集しています。締切は 2022 年 3 月 10 日(木)です。執筆要項、投稿規定、テンプレートなどにつきましては学会サイトをご参照下さい。

https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/journal/contribution.html

■ 退会について

退会は会費納付が前提となっています。退会希望の方は必ず会費納付後の年度内にお申し出下さい。

■ 住所不明の会員

お知り合いの方がおられましたら、ご連絡をお願いします。

荒屋勸、郭穎侠、金子真生、続三義、石汝傑、鄭亨奎、中司梢、原由起子、楊達、楊立明、小松紘一郎、陳瑩、李鵬、鄭琼花、東孝拓、楊纓、李偉、王姝茵、劉洋、孫日

環、金立鑫、鄧宇陽、陳玥、李瑤、郭楊、胡良娜、東方裕仁、劉陽、劉妍、恵詩文、李宛、布目孝子、劉温雯、孫婧、王天予、李日臻、楊雯斕、王巍、賈皓煬、杜天邑、董微雨、尚堃、趙暁熠、周依漪、楊洋、王仁靖、王瀟玄、呂佳駿、賈柱、張超、李怡寧、王卓、李哲、胡亜敏、呉琪、大久保蛍（敬称略）

■ 2021 年度会費納入のお願い

会費未納の方には、11月に振込用紙を同封して納入依頼のご連絡をお送りしました。年会費（一般会員6,000円）を最寄りの郵便局からお振込下さい。速やかにご入金下さいますよう、御協力をお願いします。

郵便振替　加入者名：日本中国語学会
口座番号：00980-6-282216

■ 顧問・名誉会員の推挙

顧問・名誉会員の推挙は、推薦文を添えて2022年9月30日までに学会事務局宛にお願いします。

■ 予稿集の販売

過去の大会予稿集は好文出版にてお求めになれます。第61回までは1500円、第61回から第69回までは2000円となっています。詳しくは学会ウェブサイトの「過去の予稿集について」をご覧下さい。在庫につきましては好文出版（order@kohbun.co.jp）に直接お問い合わせ下さい。

■ 事務局への問い合わせ

各会員の登録情報は、学会ウェブサイト（https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/）内の e-naf（オンライン会員情報管理システム）から、会員ご自身でログインして確認と更新ができます。事務局への問合せは、学会ウェブサイトの「お問い合わせ」ページをご利用下さい。

新型コロナウイルス感染症防止の観点から、事務局への通知やお問い合わせは、可能な限りＥメールでお願いいたします。

訃　報

本学会名誉会員である荒川清秀先生（愛知大学名誉教授）におかれましては、2021 年 8 月 14 日に満 71 歳の生涯を閉じられました。ここに謹んでお知らせいたします。先生の多大な功績を讃えるとともに、永年にわたって本学会ならびに中国語研究と教育の発展に寄与されたご尽力に感謝し、心からご冥福をお祈り申し上げます。

2021 年 12 月
日本中国語学会会長　小野 秀樹

日本中国語学会会報　2021 年秋季
（年二回発行）
発行者：日本中国語学会事務局
〒153-8902　東京都目黒区駒場 3-8-1
東京大学教養学部中国語部会内
E-mail: jimukyok_clsj@chilin.jp
URL: http://www.chilin.jp/
発行日：2021 年 12 月 24 日